

ウェルギリウス『アエネイス』

— maius opus の解釈をめぐって —

上村健二

序

本稿は、主として、Aeneis (以下 Aen.) 7.45 の maius opus の意味を、トウルヌスを中心とするイタリア人のテーマと、それに関連するユノの和解・変容との中に見出そうとする試みである。

ウェルギリウスは Aen. 7.44-5 で、maior ordo が生れる、maius opus を始めよう、と言う。この maius opus (より大いなる仕事) という言葉は、Aen. の前半 (1-6 巻) よりも後半 (7-12 巻) の方が一層偉大なものであることを示していると考えられる。これは、読者がどちらの方を好むか、或いは、芸術的にどちらの方が優れているか、といったこととは別の問題である。ここでは、一層重大なテーマを扱っているという意味で捉えておく⁽¹⁾。

R.D. Williams は Aen. の後半が maius opus と呼ばれる理由を三つ挙げている⁽²⁾。第一にアエネアスが運命の約束からその成就に至ること、第二に戦争を扱う Ilias 的な後半は Odysseia 的な前半に優ること、第三にイタリア人の古の祖先を描いていること、である。

第一点は言わば当然のことである。ある意味で、前半は後半への準備と見えよう⁽³⁾。しかし、前半で約束された運命の成就が後半で余す所なく描かれるわけではない。実際には、Aen. はトウルヌスの死を以て終るのであり、ラウイニアとの結婚⁽⁴⁾も、新しい都 (ラウイニウム) の建設⁽⁵⁾も、描かれはしない。前半で約束され、且つまた後半でその実現が描かれる最も重要な事柄はユノの和解⁽⁶⁾であると思われる。これについては後に詳述する。

第二点は伝統的な解釈である⁽⁷⁾。しかし、Aen. の前半を Odysseia 的、後半を Ilias 的とみなす色分けは単純すぎる。前半にも Ilias 的要素があ

り、後半にも *Odysseia* 的要素があるからである⁽⁸⁾。従って、*Ilias* 的であるが故により偉大であるという理論は、否定されるべきものではないが、他の考え方を排除するほど決定的なものとは言えないであろう。

第三点の古のイタリア人を描くことは前半には現れない要素である。しかし、なぜ、古のイタリア人を描くことが *maius opus* につながるのでしょうか。この点を明らかにするのが本稿の課題である。

I イタリア人のテーマ

まず、ここで言う「イタリア人」とは誰を指すかを明確にしておく必要がある。概して、イタリア人 (*Itali*) とは、ローマが誕生する前に、更にはトロイア人の到着以前に、イタリアに定住していた諸部族のことである。これは、アエネアスの敵方 (トゥルヌスやラティヌスなど) はもちろん、もっと広い意味でも使われている。

アエネアスの同盟者のうち、まず、タルコンらのエトルリア人はイタリア人に含まれる⁽⁹⁾。即ち、彼らに対して次のことが予言 (警告) される (8.502-3)。

nulli fas Italo tantam subiungere gentem:

externos optate duces.

かくも大いなる民族⁽¹⁰⁾を軛につなぐことはいかなるイタリア人にも許されない。外国人の将軍を選べ。

これは、アエネアスらトロイア人は外国人であってタルコンらエトルリア人はイタリア人であることを示している。

このお告げに従ってタルコンはエウアンデルを将軍として迎えようとするが、エウアンデルは老齢の故にこれを受け入れない (8.505-9)。また、パッラスは「外国人」という条件を満たさない (8.510-1)。

natum exhortarer, ni mixtus matre Sabella

hinc partem patriae traheret.

私は息子を励ましたことだろう——もし、彼がサビニ人を母親とする混血児として、ここから⁽¹¹⁾祖国の一部を引いていなければ。

つまり、パッラスは少なくとも半分はイタリア人なのである。更に、エウアンデルは、8.505-9では外国人と見なされているものの、8.331-2では自分たちのことをイタリア人と言っている (Itali.... / diximus)。エウアンデルは移民であり、ギリシア人 (アルカディア人) であるが、ここでは既にイタリア人になってしまっているような言い方をしているのである⁽¹²⁾。従って、ある意味では、エウアンデルやパッラスを含むアルカディア人全体もイタリア人であると言えるのである。

また、アエネアスの同盟者であるエトルリア人とアルカディア人がひとまとめに「イタリア人」と呼ばれる場合もある。まず、8.513でエウアンデルがアエネアスに *Teucrum atque Italum fortissime ductor* (トロイア人とイタリア人の最も勇敢な指導者よ) と呼び掛けている。これには将来のトロイア人とイタリア人の融合を先取した意味もあろうが⁽¹³⁾、直接的には、この「イタリア人」はエトルリア人とアルカディア人のことである⁽¹⁴⁾。次に、11.591-2で、ディアナがニンフのオピスに向かって、トロイア人であろうとイタリア人であろうと (*Tros Italusue*⁽¹⁵⁾) カミッラを殺した者に復讐するよう命じている。この「イタリア人」も、トロイア人の同盟者、即ちエトルリア人とアルカディア人を指すと考えられる⁽¹⁶⁾。

以上から、Aen.の後半における登場人物は、アエネアスの敵も味方 (エトルリア人とアルカディア人) も、トロイア人以外のほとんど全員がイタリア人であると言えるのである。

この事実を踏まえて、*maius opus* という言葉を含む Aen.第7巻のいわゆる *prooemium* (7.37-45) の検討に移る。この部分は、Aen.の前半と違って、

イタリアの立場から書かれている⁽¹⁷⁾。アエネアス個人への言及はなく、トロイア人は単に「外国の軍隊」(38-9 aduena exercitus)と呼ばれる⁽¹⁸⁾。逆に、イタリアを示す語は次々に繰り返される(38 Latio, 39 Ausonii, 43 tyrrhenam⁽¹⁹⁾, Hesperiam⁽²⁰⁾)。また, reges (37, 42) はイタリアの王たちを指すと考えられる⁽²¹⁾。特に 42 は「勇気をもって(によって)死へと駆り立てられた王たちを語ろう」となっている。Aen.の後半では、ある意味で、勝者に対してよりもむしろ戦いに倒れた者たち(トゥルヌス、パッラス、ラウスス、メゼンティウス、カミッラ)に対して焦点が合わされているが、これらの戦士は皆、イタリア人であると言える。

従って、7.37-45 が Aen.の後半の序歌(prooemium)として後半全体の主題を示す機能を持つとすれば、イタリア人を描くことが極めて重要なテーマであるということがここで示され(少なくとも暗示・予示され)ていると考えられる。更に、この部分の末尾(45)に現れる maius opus の意味とイタリア人のテーマとのかかわりも当然予想されるのである⁽²²⁾。

さて次に、イタリア人が Aen.の後半を量的に多く占めるだけでなく偉大なものとして描かれていることを明らかにしたい。

最初に、第7巻のイタリア軍のカタログを取り上げる。その内容はイタリア人を称えるものである⁽²³⁾。そのことはムーサたちへの呼び掛け(7.641ff.)の中に端的に現れている(特に 641-4)。

Pandite nunc Heliconā, deae, cantusque mouete,
qui bello exciti reges, quae quemque secutae
complerint campos acies, quibus Itala iam tum
floruerit terra alma uiris, quibus arserit armis;

女神たちよ、今こそヘリコンを開き、歌を始め給え。(即ち)いかなる王たちが戦争のために駆り立てられ、いかなる戦列が各人に従って野を満たしたか、その時既にイタリアの恵み深い大地がいかなる勇士たちによって花咲き、いかなる武具によって輝いたかを。

ここには、Ilias におけるモデル (2.484ff.) には見られない工夫が認められる。即ち、642-4 で、四つの間接疑問文を asyndeton によって並べ、最初と最後に置かれた約半行の文の間に約 1 行の文を二つ入れ、更に各文の文頭と文末に疑問形容詞とそれに修飾される名詞をそれぞれ配する、という巧みなテクスチュアである。この工夫は、いかなる王たち、いかなる戦列、といった語句を際立たせる。とりわけ、643-4 は、上の訳とは別の言い方をすれば、「トロイア人の定住の前から⁽²⁴⁾、イタリアの恵み深い大地はかくも偉大な勇士たちを産み出していたのだ」という意味になる。

カタログの内容に関しては、あまり重要でない人物についても高貴な血筋が語られ、輝かしい描写が用いられる、という点を指摘することができる。生れについては、ヘルクレスの子アウエンティヌス (656-7)、ウォルカヌスの子カエクルス (679-81)、ネプトゥヌスの子メッサプス (691) などがある。描写については、例えば、カティッルスとコラスは山頂から駆け降りるケンタウロスにたとえられ (674-7)、壮大な印象を与えている。また、メッサプスの軍隊の描写には白鳥の比喩が用いられるが (699-702)、これは Ilias 2.459ff. (カタログの前で、行軍するギリシア軍を鳥の群れにたとえたもの) をモデルの一つとしているのである。

また、カタログの存在自体がイタリア人の重要性を示すとも言える。即ち、Ilias 第 2 巻のカタログでは当然ながらトロイア軍 (の同盟軍) よりもギリシア軍の方がずっと大きく扱われるのに対して、Aen. には主人公であるアエネアスらトロイア軍のカタログはないのである。また、Aen. におけるもう一つのカタログ (10.163ff.) はエトルリア軍の船団を描いたものだが、彼らもまたイタリア人である。

次に、戦闘場面におけるイタリア人を考える。アエネアス以外のトロイア人の武勇があまり目立たないのに対して、イタリア人の活躍にはめざましいものがある。事実、Aen. 9-12 巻では、イタリア人戦士の *aristeia* が全巻にわたって繰り広げられる。即ち、第 9 巻では トゥルヌス (525ff.,

691ff.), 第10巻ではパッラス(380ff.), ラウススとパッラス(426ff.), メゼンティウス(689ff.), 第11巻ではカミッラ(648ff.), 第12巻ではトゥルヌス(324ff.), (アエネアスと共に) トゥルヌス(500ff.)の *aristeia* がある。他に, タルコンの活躍(11.729ff.)もある。

このように, イタリア人は偉大なものとして描かれていると思われるが, イタリア人に狂気, 野蛮, 傲慢などの否定的なイメージがあることも否めない。そこで, 否定的に描かれていると見られる人物にさえ美点が認められる, という点を指摘したい。

まず, メゼンティウスを取り上げる。彼は「神々を侮る者⁽²⁵⁾」と呼ばれ, その悪行が 8.481ff.で語られる。しかし, このメゼンティウスさえ, 息子ラウススの死後は, 読者の同情を集めるような仕方で描かれる(10.833ff.)。即ち, 彼は, 息子を死なせた自分を激しく責め(846-54), 深手を負っていたにもかかわらず(856-7), 死を覚悟して(881)アエネアスに立ち向かい, 悪人というよりむしろホメロスの英雄として最期を遂げるのである⁽²⁶⁾。

次に, 9.590ff.に登場するヌマヌス(レムルス)を取り上げる。この人物は, 武勇をふるうわけでもなく, 単にトロイア人を罵倒し, アスカニウスに射倒されるだけである。その意味で, ヌマヌスは最も否定的に描かれたイタリア人と言えよう。しかし, その演説(9.598ff.)はウェルギリウス自身の重要な思想を内包している。即ち, ヌマヌスの主張のポイントは質実剛健なイタリア人と柔弱なトロイア人との対比にあるが, これは *Georgica* (以下 *Geo.*) 第2巻のイタリア賛歌(136-76)や 田園賛歌(458-540)の思想と共通点を持っているのである。第一に, *Aen.* 9.603の *durum genus* は *Geo.* 2.167の *genus acre* を想起させる⁽²⁷⁾。 *Geo.* 2.167-8で列挙されるのはマルシ族, サビニ族, リグレス族, ウォルスキ族であり, これらは *Aen.*の後半で描かれるイタリアの諸部族である。 *Geo.* 第2巻においては, これらの部族が, デキウス家, マリウス家, カミッルス家, スキピオ家⁽²⁸⁾, 更にアウグストゥス(Caesar)と共に(169-72), イタリア(167と169の *haec*)が生み

出したものとして称えられている。第二に、Aen. 9. 607 は Geo. 2. 472 とほぼ同じ詩行（若者たちは労苦に耐え、乏しきに慣れ....）である。従って、ヌマヌスの演説は、単にこの人物の野蛮さや傲慢さを示すものではなく、古のイタリア人の質実剛健な生活を称えるウェルギリウスの思想を反映しているのである。

この思想は、Aen. 第 8 巻のエウアンデルの都（パッランテウム）の貧しさ、質素さのモチーフにも通じる。これは何度も繰り返されるが（8. 98-100, 105, 360, 366, 455, 472-3 など）、特に 364-5 には「貧しさの高貴さ」とも言うべき思想が見られる。このパッランテウムの地が後に偉大なローマの中心地になる（cf. 8. 337-61）ということが Geo. 第 2 巻の思想に関連していると考えられる⁽²⁹⁾。即ち、田園賛歌は次のように締め括られる（Geo. 2. 532-5）。

hanc olim ueteres uitam coluere Sabini,
hanc Remus et frater; sic fortis Etruria creuit
scilicet et rerum facta est pulcherrima Roma,
septemque una sibi muro circumdedit arces.

かつて古のサビニ族も、レムスとその兄弟も、このような生活を培っていた。確かにこのようにして、強大なエトルリアは発展し、ローマは諸国家のうち最も美しいものとなり、七つの城壁を一つに囲んだのだ。

ここには、「古のイタリア人の質実剛健な生活⁽³⁰⁾によってローマが偉大になった」という思想が見られるのである。

イタリア人とローマのつながりは、Aen. 8. 626ff. の盾の模様の描写にも反映されている。即ち、626では *res Italas*（イタリアの歴史）と *Romanorum triumphos*（ローマ人の凱旋）が、714-5では *Romana moenia*（ローマの城壁）と *dis Italis*（イタリアの神々）が、隣接して現れる。また、678 ではアウグストゥスがイタリア人を率いると言われている⁽³¹⁾。

イタリア人がローマを偉大にするという思想は、Aen.12.791-842のユピテルとユノの場面で頂点に達する。即ち、ユノは次のように懇願する（827）。

sit Romana potens Itala uirtute propago.

ローマの民族がイタリアの uirtus によって強大でありますように。

ユピテルもこれを承諾し（833）、更に次のように言う（838-9）。

hinc genus Ausonio mixtum quod sanguine surget,

supra homines, supra ire deos pietate uidebis,

ここからイタリアの血と混じって起こる民族が pietas において人間たちをも神々をも越えるのを汝は見るであろう。

つまり、ローマ民族はトロイア人とイタリア人の融合から生れ、イタリアの uirtus によって偉大になるのである。

こうした Aen. の後半における思想は前半には明示されていない。Aen. 第1巻の序歌（1-33）やユピテルの予言（257-96）においては----これらはAen. 全体の主題を提示する上で重要な役割を果たしているはずだが----そもそもトロイア人とイタリア人の融合という考えすら全く見られない。ここでは、ローマはトロイア人から生れるとされているようである⁽³²⁾。イタリア人との融合という事柄は、6.756ff. のアンキセスの言葉の中で（特に757と762）初めて明確な形で現れる⁽³³⁾。しかし、この部分にも、Aen. の後半やGeo. 第2巻の思想とは異なる点がある。第一に、トロイア人と融合する前のイタリア人が描かれるわけではなく、そのような古のイタリア人の偉大さという要素は現れない。第二に、Aen.6.781ff. でローマが英雄の輩出に恵まれる（784 *felix prole uirum*）ことが語られ、これとGeo.2.167ff. との平行が指摘されているが⁽³⁴⁾、実際には「ローマ」と「イタリア」という主語の違いがある。この点で、Geo.2.167ff. はむしろ前述のAen.7.643-4

に近いのである。

以上から、イタリア人のテーマの結論をまとめておく。まず、Geo. 第2巻では古のイタリア人の質実剛健さが称えられ、これがローマ人を偉大にしたという思想がある。しかし、Aen. の前半ではトロイア人と融合する前のイタリア人は描かれず、その偉大さという要素はない。それに対し、Aen. の後半では古のイタリア人が偉大なものとして描かれる。これにより、Aen. の前半の思想（トロイア人がローマを生み、偉大にする）から、後半の思想（元来偉大なものであったイタリア人と偉大なトロイア人との融合から更に偉大なローマが生れる）への発展が生ずる。従って、Aen. の後半は前半よりも一層重大なテーマを扱うことになる。つまり、イタリア人を描き、イタリア人の偉大さという要素を加えることによって、Aen. の後半は *maius opus* となるのである。

II イタリアの *uirtus* とトゥルヌス

既に見たように、ユピテルとユノの最後の対話の場面 (12.791ff) で、ローマを偉大にする要素として *pietas* (839) とイタリアの *uirtus* (827) が強調されている。このうち、*pietas* を代表する人物は、無論、アエネアスである。他方、イタリアの *uirtus* はトゥルヌスによって代表されると考えられる⁽³⁵⁾。この点をテキストに即して考察したい。

まず、*uirtus* という語がトゥルヌスに関して用いられた箇所を検討する。11.378ff. では、トゥルヌス自身がたびたびこの語を口にしている。即ち、386 には「*uiuida uirtus* が何をなし得るか」、415 には「いつもの *uirtus* が少しでもあればよいのに」、441 には「*uirtus* にかけては古人の誰にも劣らぬこのトゥルヌスは」、444 には「もしこれが *uirtus* と栄光（の問題）ならば」とある。これらの箇所には「イタリアの」*uirtus* という含みがある。というのは、415 は「我々（イタリア人）の *uirtus*」を示唆したものと考えられ、440-4 は *uirtus* によってイタリア人を代表して戦うという決

意の表明だからである。つまり、トゥルヌスはイタリアの *uirtus* の代表者をもって任じているのである。第12巻では、まず19-20でラティヌスがトゥルヌスに「汝が *uirtus* において抜きん出ているだけ、それだけ一層……」と言う。666-8には、トゥルヌスの心に「*conscia uirtus* が沸き起った」とある。アエネアスとの戦いにおいては、714には「運（偶然）と *uirtus* が一つに混ぜ合わされた⁽³⁶⁾」とあり、最後に *uirtus* という語が使われるのもトゥルヌスについてである(913-4)。

*sic Turno, quacumque uiam uirtute petiuit,
successum dea dira negat.*

そのように、トゥルヌスが *uirtus* によってどこに活路を求めても、恐ろしい女神が成功を拒んだ。

ここで、ディラ (*dea dira*) はユピテルによって送られたのであり、(843ff.)、ユピテルの意志は運命に等しい。トゥルヌスは運命の故に本来の *uirtus* を発揮できないのであり、その点にトゥルヌスの悲劇性があるとも言えよう。他に、トゥルヌスがライオンにたとえられ、それに *uirtus* という語が使われた箇所もある(9.795)。

他方、アエネアスがトロイア人を代表するのと並んでトゥルヌスがイタリア人を代表して戦うことも、第12巻で強調されている。まず、183では、アエネアスが「もしたまたま勝利がイタリアの (*Ausonio*) トウルヌスに帰したならば」と言い、トゥルヌスがイタリア人の代表であることが強調される。次に、500ff.ではアエネアスとトゥルヌスによる殺戮が交互に描かれ、特に、502ではトゥルヌスとアエネアス (*Troius heros*) が併置され、521ff.では両者に同一の比喩が用いられ、526では両者の名が隣接して現れる。同様に、715ff.においても、両者がぶつかりあう牡牛にたとえられた後、723でアエネアス (*Tros Aeneas*) とトゥルヌス (*Daunius heros*⁽³⁷⁾) が併置される。更に強い印象を与えるのは707-9(ラティヌス自身、世界の遠く離れた場所

に生れた偉大な両雄が相まみえ、剣で事を決することに呆然とした)である。ここでは、トロイアに生れた英雄アエネアスとイタリアに生れた英雄トゥルヌスが同列に置かれているのである。

以上から、トゥルヌスはイタリアの *uirtus* を代表する人物として描かれていると考えられる。トゥルヌス個人は死んでも、トゥルヌスによって代表されるイタリアの *uirtus* は、アエネアスによって代表される *pietas* と共に、ローマを偉大にする要素としてローマ人に受け継がれる。前述の 12.827 (及び 839-40) にはこうした意味が込められていると思われる。従って、*maius opus* の意味においてもトゥルヌスの存在は極めて大きなものと言えるのである。

Ⅲ トウルヌスの悲劇

Aen. の後半は「トゥルヌスの悲劇」として捉えることもできる⁽³⁸⁾。前半でこれに対応するのはデイドの悲劇である。両者を比較する際に、Aen. の後半が *maius opus* であることを念頭に置けば、デイドの悲劇よりもむしろトゥルヌスの悲劇の方が一層偉大だと言えるような点があるのではないかと推測される。以下は、これを悲劇の結末に求めようとする試みである。

トゥルヌスを悲劇的人物と見るか「国家の敵」のような悪者と見るかについては見解が分かれている⁽³⁹⁾。しかし、Aen. の後半ではイタリア人が偉大なものとして描かれており、その中でも最大の英雄であるトゥルヌスはやはり偉大な人物として描かれていると考えられる。また、デイドが悲劇的人物ならば、トゥルヌスにはデイドとのパラレルが数多く見られることから、トゥルヌスもまた悲劇的人物と呼ぶに値すると思われる。そこで、両者の類似点を考えてみる。

両者とも、悲劇の始まりは神⁽⁴⁰⁾によって狂気を吹き込まれることであり、アエネアスの使命を妨げるためにユノによって利用される。また、第4巻は *at regina* で、第12巻は *Turnus* で始まり、デイドとトゥルヌスがそれぞれ

れの巻で中心的な役割を果たすことが予示される⁽⁴¹⁾。

しかし、トゥルヌスの悲劇において デイド との平行が特に明白に現れるのは 第12巻の結末に近い部分である。第一に、狩られる鹿の比喩(12.749-55, 4.69-73)、第二に、凶兆の鳥(12.861-6, 4.462-3)、第三に、悪夢の比喩(12.908-12, 4.465-73)がある。夢の比喩(cf. Ilias 22.199ff.⁽⁴²⁾)については、夢の心理的な面が描かれる点や、第4巻で比喩の中に エウメニデス(469)や ディラエ(473)が現れるのに対応して第12巻でトゥルヌスを実際のディラが脅かす点で、緊密な平行が認められる。

また、トゥルヌスの妹ユトゥルナとデイドの妹アンナとの平行もある。まず、この二人に同一の詩行(12.871, 4.673)が使われている。次に、12.880-1と4.678-9は共に「一緒に死ぬことができればよかったのに」という意味である。

こうした平行の積み重ねにより、読者は、トゥルヌスの悲劇の結末に近い部分において、デイドの悲劇を思い起し、両者を比較するように促される。ところが、トゥルヌスの最後の態度はデイドのそれとは全く異なっている。従って、それまでの類似は、最後の決定的な相違を際立たせることになる。

トゥルヌスは和解を申し出る(12.930-8)。これを「命乞い」としてトゥルヌスを貶める解釈⁽⁴³⁾は当たっていない。トゥルヌスは、11.443-4で「事態が神々の怒りであるか、*uirtus*と栄光の問題であるか」という二通りの可能性を挙げたが、自らの敗北によって神々の怒り(cf. 12.647, 895)を最終的に認識したのである。つまり、運命に基づくアエネアスの使命を妨げたという罪をトゥルヌスはここで認めたのだと考えられる⁽⁴⁴⁾。

これに対し、デイドはアエネアスの運命・使命を理解せず、その言葉は呪咀で終る。まず、デイドは4.376-8で神託や神々の命令といったものを口にしますが、これはアエネアスの言葉(345-6, 356-8)を繰り返すことによる嘲りである。次に、アエネアスへの言葉は呪いで終る(382-7)。また、

590ff.の独白では、アエネアスへの呪い(612-20)に加えて、未来の戦争への望み(622-9)が語られる。更に、ディドの最後の独白(651ff.)もやはり呪咀(661-2)で締め括られる⁽⁴⁵⁾。

最後に、両者の死がもたらすものの対照を各々の死に関して用いられた語句のイメージから指摘したい。まず、トゥルヌスの死はその胸にアエネアスが剣を埋め込む(12.950 *condit*)ことによる。この *condo* は国家・民族を創建するという意味で用いられる語でもある。そこで、上の箇所を *Aen.* の序歌を締め括る 1.33 と結び付けて考えることもできよう。

tantae molis erat Romanam condere gentem.

ローマ民族を創建することはこれほどの難業であった。

ここには、「ローマ民族の創建にはかくも大いなる犠牲を要した」というニュアンスも読み取れるであろう⁽⁴⁶⁾。ともかく、トゥルヌスの死は民族の融合と国家の創建につながるものである。

ディドの死のイメージは全く逆である⁽⁴⁷⁾。宮殿に響き渡る悲嘆の声はカルタゴの陥落の様子そのものにたとえられる(4.669-71)⁽⁴⁸⁾。また、アンナは 682-3 で「あなたは民をも都をも滅ぼしてしまった」と言う。つまり、ディドの死は民族と国家の破滅につながるのである。

このように、*Aen.*の主題である民族と国家の創建という観点から、トゥルヌスの悲劇はその結末においてディドの悲劇よりも偉大なものと言える。この点が *maius opus* という言葉に対応するのである。

IV ユノの和解と変容

序で述べたように、ユノの和解は前半で約束され、後半でその実現が描かれる。従って、それ自体が *maius opus* の一要素を成すものと考えられる。また、そもそもユノの怒りがトロイア人の苦難の原因であり (cf. 1.4, 8-

33) Aen.の序歌の前半を締め括る語もその怒り (iraе) である (1.11⁽⁴⁹⁾).

従って、ユノの和解は Aen.の重要なテーマ⁽⁵⁰⁾の帰結でもある。しかし、このユノの和解は、それ自体として重要であるだけでなく、トゥルヌスを中心とするイタリア人のテーマにも密接に関連しているのである。

ユノは、12.791ff. のユピテルとの対話において和解し、トロイア人の迫害者からローマ人の守護神へと驚くべき変貌を遂げる (838-41)。これはやや唐突な印象を与える⁽⁵¹⁾が、実は、ユノの変容には一連のプロセスが認められるのである。以下の議論は、トゥルヌスを中心とするイタリア人のテーマと関連付ける形で、このプロセスを実証しようとするものである。

ユノは、Aen.の後半においても、最初は単なるトロイア人の迫害者であり、アエネアスらを妨害し苦しめることを目的としている。しかも、7.293ff. (後半でのユノの最初の言葉) では、ユノはトロイア人のみならずイタリア人をも苦しめようとしている (特に 316-9)。

at licet amborum populos exscindere regum.

hac gener atque socer coeant mercede suorum:

sanguine Troiano et Rutulo dotabere, uirgo,

et Bellona manet te pronuba.

しかし、両方の王の民を殺すことは許される。婿と舅は身内の者たちのこうした代償によって一緒になるがよい。乙女よ、汝はトロイア人とルトゥリ人の血によって婚資を与えられるであろう。また、ベッロナが介添えとして汝を待っている。

ここでは、ルトゥリ族 (主にトゥルヌスを指すと考えられる) は単なる道具であるかのように扱われ、ラティヌス (socer) やラウィニア (uirgo) も嘲りの対象となっている。これが第一段階である。

次に、9.1ff. でユノはイリスを遣わしてトゥルヌスを駆り立てる。戦闘場面では、9.745-6 でトゥルヌスを狙った槍をユノがそらし、802-3 ではユノ

がトゥルヌスに力を与えていたことが示される。続いて、10.1ff. の神々の会議においては、アエネアスの守護者（母親）であるウェヌスに対するユノの反論（63-95）がある。この論戦はレトリカルなものであって、両者の言葉を文字通りに取ることはできない（cf. 42-62）が、81-4 は暗示的である。即ち、ユノは、アエネアスの守護者としてのウェヌスの行為（81-3）を、自分がルトゥリ族（主としてトゥルヌス）を助けたことと対置しているのである。以上の部分におけるユノの態度は第一段階とはやや異なるように思われる。これは、トゥルヌスの守護者という次の立場への過渡的段階と考えられる。

10.606ff. におけるユノは、明らかに、トゥルヌスの守護者という立場を取っている。即ち、ユノは、614-6 では「私がトゥルヌスを戦いから救いだし、父親ダウヌスのために無事に守ってやるのをあなたは拒まないでしょう」とユピテルに懇願し、628ff. では涙を流して（628 *adlacrimans*）トゥルヌスの運命を悲しんでいる。また、685-6 にはユノのトゥルヌスへの哀れみが示される（686 *miserata*）。ここでは、ユノはトロイア軍の勝利を妨げることよりもむしろトゥルヌスの命を救うことに意を注いでいるのである。この部分を第二段階と呼ぶことができる。

次にユノが登場するのは ユトゥルナ⁽⁵²⁾を駆り立てる場面（12.134ff.）である。ここでは、トゥルヌスの守護者としての立場が強く出ている（149-53, 157 など）だけでなく、次の段階であるイタリア人の守護神という立場が先取りされている（特に 147-8）。

qua uisa est Fortuna pati Parcaequae sinebant
cedere res Latio, Turnum et tua moenia texi;

運命の女神が認めているように思われ、事がラティウムのためにうまく進むのをパルカエが許していた限りは、私はトゥルヌスと汝の城壁を守った。

つまり、Latio や moenia といったトゥルヌス個人を越えた要素が現れている点に、第二段階との相違が見られるのである。また、153には「恐らく哀れな者たちにより良いことが続くであろう」とあり、miseros という複数形が使われている。この部分は、トゥルヌスの守護者から次の立場（イタリア人の守護神）への過渡的段階と言える。

最後に、12.791ff. のユノの和解の場面を考察する。ユピテルは、ユノがトゥルヌスに力を貸したことに触れ（798-9）、事が最終段階に至ったことを宣言し（803）、ユノにそれ以上の試みを禁じる（806）。これに対し、ユノは、自分にはユピテルの意志がわかっているので不本意ながらトゥルヌスを見捨てたのだ、と言う（808-9）。ここでユノはトゥルヌスの守護者という立場を捨てたと言える。819ff.の懇願は、イタリア人のため（820の pro Latio⁽⁵³⁾など）である。その頂点である827については既に述べたが、ユノの望みは、もはやトゥルヌス個人が生き長らえることではなく、言わばトゥルヌスのエッセンスであるイタリアの uirtus がローマを偉大にする要素として生き続けることなのである。こうした懇願をユピテルも認め、トロイア人が名を捨て、言語を捨て、イタリア人の中に埋没することを約束する（834-6）。このように、ユノは、イタリア人の側に立って、イタリア人の利益のために、トロイア人側から大きな譲歩を引き出したのであり、それ故に和解するのである。これが第三段階であるが、更に、838-41は次の段階に入っている。即ち、トロイア人とイタリア人の融合から生れる民族（ローマ人）のユノへの崇拜が約束され、ユノも喜んで（841 laetata）これを承諾する。ここで、ユノはイタリア人の守護神からローマ人の守護神へと変容するのである。

このように、ユノの和解は、一連の変容のプロセス（単なるトロイア人の迫害者→トゥルヌスの守護者→イタリア人の守護神→ローマ人の守護神）に基づいているのである。

さて、これをトロイア人の側から見ればどうであろうか。アエネアスらにとって、ユノを祈りと捧物によって克服し⁽⁵⁴⁾味方にすることは、Aen.の前

半からの課題であった。即ち、アエネアスらは、3.433-40のヘレヌスの指図に従って3.546-7でユノに供物に捧げ、同様に、8.59-61のティベリヌスのお告げに従って8.84-5でユノに犠牲（白豚）を捧げる。また、アエネアスは12.178-9でもユノに祈っている。しかし、ユノがこうした捧物や祈りに動かされた様子はないのである⁽⁵⁵⁾。

むしろ、ユノは、イタリア人の守護神という立場があったからこそ12.819ff.の条件で和解したのであり、また、トゥルヌスの守護神という立場があったからこそイタリア人の守護神になったのだと思われる。換言すれば、ユノには、トゥルヌスの守護者という立場がなければイタリア人の守護神という立場もなく、従ってローマ人の守護神という立場もなかったと考えられる。それ故、ユノを克服して味方にするというトロイア人の課題は、ユノがローマ人の守護神になるという形で、イタリア人を通じて、更にはトゥルヌスを通じて達成されたことになる。この点にも、トゥルヌスを中心とするイタリア人のテーマの重要性が現れているのである。

結論

以上の議論の要点は次の通りである。

(1) Aen.の後半はイタリア人を偉大なものとして描くことによって *maius opus*となる。即ち、前半の思想（トロイア人がローマを生み、偉大にする）にGeo.第2巻の思想（古のイタリア人がローマを偉大にした）が加わることにより、後半の思想（元来偉大であったイタリア人と偉大なトロイア人の融合から更に偉大なローマが生れる）はより発展したものとなる。従って、後半はより重大なテーマを扱ったものである。

(2) ローマを偉大にするのは、アエネアスによって代表される *pietas* と共に、トゥルヌスによって代表されるイタリアの *uirtus* である。

(3) トウルヌスの悲劇はその結末においてディドの悲劇よりも偉大である。即ち、アエネアスの運命を悟らぬディドの死は民族と国家の破滅をもた

らし、運命を悟るトゥルヌスの死は民族と国家の創建をもたらす。これが *maius opus* に対応する。

(4) ユノの和解（それ自体 *maius opus* の一要素）は、段階的変容（単なるトロイア人の迫害者→トゥルヌスの守護者→イタリア人の守護神→ローマ人の守護神）に基づいており、トゥルヌスを中心とするイタリア人のテーマと密接に関連している。

総じて、前半にはなかった「イタリア人の偉大さ」という要素が加わることにより、後半は *maius opus* となる。このことは、ローマの建国（トロイア人とイタリア人の融合）、それに要した犠牲（デイドとトゥルヌス）、アエネアスの苦難（ユノの怒り）といった *Aen.* 全体の主要なテーマにおいて、極めて重要な意味を持っているのである。

注

ウェルギリウスのテキストとしては、特に注記しない限り、R. A. B. Mynors, *P. Vergili Maronis Opera*, O. C. T. 1983 (1969) を用いた。

(1) Cf. L. A. Constans, *L'Énéide de Virgile*, Paris 1938, 235.

(2) R. D. Williams, *The Aeneid of Virgil, Books 1-6/7-12*, Basingstoke-London 1984(1972/1973), ad 7.37ff.

(3) Cf. K. Quinn, *Virgil's Aeneid*, London 1968, 178, G. E. Duckworth, *Structural Patterns and Proportions in Vergil's Aeneid*, Ann Arbor 1962, 7, C. J. Fordyce, *P. Vergili Maronis Aeneidos Libri VII-VIII*, Oxford 1977, ad 7.37-45.

(4) クレウサの予言の中で暗示される (2.783-4)。

(5) ユピテルの予言の中で約束される (1.258-9)。

(6) 1.279-82でユピテルによって予言され、12.807ff.で実現される。

(7) Cf. Seruius: *Seruii Grammatici qui feruntur in Vergili carmina commentarii*, rec. G.Thilo et H.Hagen, Vol. II, Hildesheim 1961 (Leipzig 1884), ad 7.1. 現代でもこれが普通の解釈であろう。 Cf. J. Conington-H.Nettlehip, *The Works of Virgil*, Vol. II/III, Hildesheim 1963 (London 1884⁴/1883³), ad 7.44, W.A.Camps, *An Introduction to Virgil's Aeneid*, Oxford 1969, 53-4, V.Pöschl, *Die Dichtkunst Virgils* Berlin-New York 1977³, 27.

(8) Cf. K.W.Gransden, *Virgil, Aeneid Book VIII*, Cambridge 1976, 5, G.N.Knauer, *Die Aeneis und Homer*, Göttingen 1964.

(9) 同じエトルリア人であって トウルヌス側につくメゼンティウスとその息子ラウスはイタリア軍のカタログの先頭に現れる (7.647-54)。

(10) エトルリア人を指すと解される。 Cf. T. E. Page, *The Aeneid of Virgil*, Books I-VI/VII-X II, London 1957(1894)/1956(1900), ad loc., F.Plessis-P.Lejay, *Œuvres de Virgile*, Paris 1945(1919), ad loc., P.T.Eden, *A Commentary on Virgil: Aeneid VIII*, Leiden 1975, ad loc.

(11) イタリアを指すと解される。 Cf. Page, op. cit., ad loc., Conington-Nettleship, op.cit., ad loc., Eden, op.cit., ad loc.

(12) Cf. Seruius, ad loc., Conington-Nettleship, op.cit., ad loc., R.D.Williams, op.cit., ad loc.

(13) Cf. Gransden, op.cit., ad 8.511-3.

(14) エウアンデルはアエネアスへの言葉 (8.470ff.) を *maxime Teucrorum ductor* で始め、496 ではアエネアスをエトルリア人の指導者 (*ductor*) にしようと言い、513 の呼び掛けの直後に パッラス率いるアルカディア人を合流させようと言う。二つの呼び掛けの違いは同盟軍を得る前と後の違いなのである。

(15) Seruius, ad loc.の読みと解釈に従って *-que* でなく *-ue* を採る。

(16) Cf. Conington-Nettleship, op.cit., ad loc., R.D.Williams,

op.cit., ad loc.

(17) この立場は既に 7.1 の *litoribus nostris* に現れている。「我々の」とは「イタリアの」の意に他ならないからである。Cf. Seruius, ad loc., Plessis-Lejay, op.cit., ad loc.

(18) アエネアスは Aen. の後半でたびたび「外国人 (*aduena, externus*)」と呼ばれる (10.516, 12.261; 7.68, 98, 424, 8.503, 10.156; cf. 7.255, 270)。これに対し, 6.93-4 ではラウイニアが *coniunx hospita* (外国の花嫁), 彼女との結婚が *externi thalami* とされる。

(19) *Thyrrhenam manum* はタルコン率いるエトルリア軍と解されるが (cf. R.D.Williams, op.cit., ad loc., Fordyce, op.cit., ad loc.), これがイタリア人であることは既に述べた。

(20) 「ヘスペリア (西の国)」は Aen. においてはイタリアの同義語である。Cf. 1.530-3 (=3.163-6), 3.185.

(21) Cf. Conington-Nettleship, op.cit., ad loc.

(22) 無論, ここで戦争というテーマが示され, それが *maius opus* の意味につながることも否定できない。

(23) Cf. E.Fraenkel, *Some Aspects of the Structure of Aeneid VII*, JRS 35(1945), 1-14 (特に 8-9), R.D.Williams, *The Function and Structure of Virgil's Catalogue in Aeneid 7*, CQ 11(1961), 146-53 (特に 147-8)。

(24) *iam tum* は単に古さ (cf. Page, op.cit., ad loc.) を示すだけではない。ここで強調されるのは, トロイア人がイタリア人の名を高めた (cf. 7.98-9) だけではなく, イタリア人が元来, イタリア人そのものとして偉大であった, ということだと思われる。

(25) *contemptor diuum* (7.648) および *contemptor deum* (8.7)。

(26) ラウススの死後のメゼンティウスについては cf. Page, op.cit., ad 10.848, R.D.Williams, op.cit., ad 10.833ff., 846, 900, 901.

(27) Aen.11.48でイタリア人は *acres uiri* 及び *dura gens* と呼ばれる。

(28) *duros* という形容詞を伴う (170) .

(29) Cf. B.Otis, *Virgil: A Study in Civilized Poetry*, Oxford 1964, 336-8.

(30) サビニ族 (Geo.2.532) は古の質実剛健なイタリア人の典型と言えよう。また, *hanc uitam* (532) と *sic* (533) は 513-31 の農夫の生活を指すが, これも質実剛健なものと言える (特に 531 の *corpora praedura*) .

(31) Cf. R.D.Williams, *op.cit.*, *ad loc.*, Eden, *op.cit.*, *ad loc.*, Gransden, *op.cit.*, *ad loc.*

(32) 1.6-7は「そこから....ローマが生まれた」ということだが, *unde* の意味は, 「そのことから」とも取れるものの, 「アエネアス (ないしトロイア人) から」という印象が強い。Cf. R.G.Austin, *P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Primus*, Oxford, 1985(1971), *ad loc.*, Conington-Nettleship, *op.cit.*, *ad loc.*, Page, *op.cit.*, *ad loc.* 同様に 1.19-22 と 234-7 もトロイア人からローマが生れることを示す (21 及び 234 の *hinc* と 12.838 の *hinc* との対応に注意)。また, 1.286-8 ではユリウス家がトロイア人, 特にアスカニウス (=Iulus) の血筋を引くことが強調されるが, アスカニウスにはイタリア人との融合の象徴であるラウィニアの血筋が入っていない。

(33) 但し, 4.236 には *prolem Ausoniam* という言葉があり, 6.716-8 には 756ff.のための前置きがある。

(34) Conington-Nettleship, *op.cit.*, *ad loc.*, R.D.Williams, *op.cit.*, *ad loc.*

(35) Cf. Poschl, *op.cit.*, 137-8.

(36) これは, トウルヌスの *fors* とアエネアスの *uirtus* (cf. Seruius, *ad loc.*) というわけではなく, 両者の *fors* と *uirtus* であろう。Cf. R.D.Williams, *op.cit.*, *ad loc.*

(37) トウルヌスは 12.902 でも *heros* と呼ばれる。

(38) Cf. J.B.Garstang, *The Tragedy of Turnus*, Phoenix 4(1950), 47

(39) 典型的な悪者説としては cf. A.Wlosok, *Vergil in der neueren Forschung*, *Gymnasium* 80(1973), 129-51 (特に 149). これに対する反論としては, 岡道男 「ウェルギリウスの英雄像 — トウルヌスの死 —」 『ギリシア・ローマの神と人間』, 東海大学出版会, 1979, 341-74 (特に 355-9) 参照.

(40) デイドの場合はウェヌスから送られたクピド. トウルヌスの場合はユノが遣わしたアッレクト.

(41) 第4巻と第12巻の冒頭におけるパラレルについては cf. Pöschl, *op.cit.*, 142, M.C.J.Putnam, *The Poetry of the Aeneid*, Cambridge, Mass. 1966(1965), 153-5.

(42) *Ilias*におけるモデルにない一人称の動詞 (910 *uidemur*, 911 *sucidimus*) はトウルヌスに対するウェルギリウスの同情を表すと考えられる. Cf. G.Williams, *Technique and Ideas in the Aeneid*, New Haven-London 1983, 172-3, R.O.A.M.Lyne, *Further Voices in Vergil's Aeneid*, Oxford 1987, 6.

(43) R.Heinze, *Virgils epische Technik*, Leipzig 1915³, 212, Page, *op.cit.*, ad 12.935, R.A.Hornsby, *Patterns of Action in the Aeneid*, Iowa 1970, 139.

(44) 岡, 前掲論文, 359-63 参照. また, 事態がもはや *uirtus* の問題ではないということは 前述の 12.913-4 に示されている (11.312-3 をも参照).

(45) デイドは 6.450ff. にも現れるが, 相変わらず敵意を持ち (472 *inimica*), アエネアスの言葉に耳を貸さない. これは, トウルヌスとは逆に, 和解を拒絶する態度だと思われる.

(46) Cf. Garstang, *op.cit.*, 55.

(47) これらの部分については cf. Pöschl, *op.cit.*, 98-100.

(48) *Ilias* におけるモデル (22.410-1) はヘクトルの死がトロイアの滅

亡につながることを示す（岡道男，「ホメロスの独創性 ——『イリアス』と「城市を滅ぼすアキレウス」——」，『西洋古典学研究』36，1988，1-22 特に 4頁参照）。これがトウルヌスの死ではなくディドの死に採用された点に両者の対象が認められる。

(49) この文は前述の 1.33 と響き合っている。Cf. Constans, *op.cit.*, 42.

(50) Cf. R.D.Williams, *op.cit.*, ad 1.1ff., Austin, *op.cit.*, ad 1.18.

(51) Cf. W.R.Johnson, *Darkness Visible*, Berkeley 1976, 124ff.

(52) ユノが遣わす下級の女神がアレクト (7.324ff.) からイリス (9.1ff.)，更にこのユトウルナに交替してゆくこともユノの段階的変容を反映している。

(53) この場面では「ラティウム」と「イタリア」が混用されている。即ち，ユノは，819-26 ではラティウム人のために懇願するが，827ではイタリアという語を使う。ユピテルの方も，837 ではラティウム人と言ひ，834 と 838 ではアウソニア (=イタリア) と言う。なお，820 の *tuorum* はサトウルヌスを示唆したものだが (cf. Seruius, *ad loc.*)，サトウルヌスの地 (*Saturnia tellus*) はラティウムをもイタリアをも示し得る。Aen.においては 8.319ff.が参考になる。即ち，322-3 では *Saturnia tellus = Latium* と考えられるが，329 ではいつの間にか *Saturnia tellus* がイタリア全体を指しているのである。

(54) 3.439 と 8.61 に同じ *supera* という命令形が用いられている。

(55) 12.178-9 の祈りのすぐ後に (216ff.)，ユノに駆り立てられたユトウルナによる介入がある。